

# 桃山・江戸前・中期の産衣十三領について 下

——近世小裁・中裁衣類調査報告 一——

## 神谷榮子

(9) 伝伊達吉村所用浅葱宝尽し模様友禅産衣

(図版七 挿図34、37、39)

すでに本稿「中」(美術研究二七二号、一六頁)において述べたように、この産衣も前出二領の産衣(7)(8)と共に仙台藩の陰陽師であった平野家に伝来し、(7)(8)の二領は四代仙台藩主伊達綱村所用、これは五代仙台藩主伊達吉村所用といわれている。

伊達吉村は延宝八年(1690)六月二十八日、伊達肥前宗房(二代仙台藩主伊達忠宗の四男)の第一子として黒川郡宮床館に出生、母は片倉氏阿松で、四代仙台藩主伊達綱村に子が無かったため元禄八年(1695)十二月世子となり、同十六年(1703)五代仙台藩主となった。歿年月日は宝暦元年(1751)十二月二十四日である。

この友禅染の産衣も四代仙台藩主伊達綱村所用の友禅染産衣(7)と同様染め抜きの五つ紋附で、紋も同様仙台伊達家正式の定紋である。即ち、図版七bに見られる竹に雀の丸紋で、二本の竹を用いて竹丸を形成し、

竹丸の内に飛雀を二羽相對させる。竹の幹は各幹四節で、葉は各幹に二六葉(外側に一五葉、内側に一一葉)、竹の葉には露があり、露の数は各幹に八点(外側に六点、内側に二点)である。

この凹凸の多い複雑な図様の家紋が、五つ紋の個所に、それぞれ友禅染の白あげ部分と同様に糊置防染法(この産衣の場合後述するように両面糊置で白場はあげてある)で輪郭も明瞭に白抜きにされ、紋の輪郭線や露の墨入れは、友禅の墨入れと同様に繊細に加筆されている。

以上のようにこの産衣の紋は、四代綱村所用の友禅染産衣(7)と同一の図様で、紋所を表出する技法も片面糊置と両面糊置の差はあれ、殆ど同様の技法が用いられている(美術研究二七二号一六頁挿図23参照)。

表は地文が紗綾形に蘭菊の輪子地註32で、宝尽しの模様註33が型匹田註33も併用した友禅染であらわしてあり、附紐も表裂と共の友禅で、裏は紅平絹の通し裏、薄綿入れになっている。

この産衣に見られる友禅染の模様は、一般にいわれる絵羽註34と異り、縫目を渡って構成されている模様は何処にも見当らないが、模様は、上前

構成であり、下絵附は絵羽同様に仮仕立てを行ってなされたものと思われる。

この宝尽しの模様は、丁字、隠笠、隠囊、鍵、七宝、宝珠、金囊、打出の小槌<sup>註35</sup>で、図様はこれら宝尽しの持つ意味が説明的に表現されている。即ちわが国の宝尽し模様は中国から舶載された名物裂系織物<sup>註36</sup>(挿図35

挿図34 伝伊達吉村所用浅葱宝尽し模様友禅産衣(9)  
b. 下前 a. 上前

(挿図34 a)、下前  
(挿図34 b)、背面  
(図版七 a)、袖、  
附紐等適宜置かれて  
いる絵羽の配置

るようになっていた友禅染技術を使って、従来の織文様のな宝尽しの構成を、配置、形、大きさ、色、ともに自由な絵画的模様構成に変えた成功だと思われる。

この種の説明的内容を持つ絵模様は、やがて江戸中・後期の友禅染完成期・全盛期を迎えて、自由な形と色の絵模様が精巧さを極めた友禅染技術を駆使して意図するままに染めあらわされるようになると、細部に至るまで写實的に説明的に描写され、その意味するところも極度に説明的になっていくのである。<sup>註37</sup>つまり、こういった江戸中・後期における友禅模様の傾向が、江戸前期後半に当る延宝八年のこの伊達吉村所用友禅産衣にその先駆的様相を見せているともいえるのである。

挿図34 同上 c. 背面部分

にその源を発しているため、染や繡<sup>ぬい</sup>の宝尽し模様の場合であっても、通常、織文様の宝尽し同様に個々の宝物の大きさが小さく、且つ間隔が狭く、等間隔的であるので、個々の宝物は目立たない(例―挿図36、挿図18―美術研究 二七二号一三頁―)がこの産衣の宝尽し模様は、個々の宝物が比較的大きく、不均等に散らしてあるので、一つ一つが強調され、それぞれを持つ意味が見る側に伝わってくる。

産衣に似つかわしい宝尽し模様の吉祥的意義が、このように効果的に表出できたのは友禅染の手法に拠ったからで、それは、当時の素朴ながら或程度は自由に線や色が染め出せ

挿図35 宝尽し文様名物裂  
a. 本能寺緞子 明

b. 禪地に宝尽し文様金襴 明

部分を白あげにし、その白あげ部分に紅と藍の摺匹田ナリびつた、註42墨の細い線描、墨のぼかして模様が描かれていた。糸目は、伝伊達綱村所用網干に貝模様友禅産衣(7)の糸目もそうであったが比較的太く、糸目の状態から推測して、筒糊註43ではなく楊子糊註44のようである。友禅染の技術は(7)の産衣同様、総体に素朴である。

また宝尽しの模様は、図版7a、挿図34 a、b、で見られるように半模様註45風な配置になっており、

江戸中期に近い時代の意匠構成を感じさせる。

この産衣も仕立ては「うぶ」であり、その形態は伝伊達綱村所用産衣(7)(8)より二二年時代の下るものではあるが、江戸中期の産衣に、より近い形と見受けられる。

以上考察を進めてきたように、この産衣も伝伊達綱村所用産衣(7)、(8)同様、仙台・伊達藩の陰陽師平野家に伝わって来た確実性のある伝来で、紋所も仙台伊達家の正式の家紋であり、産衣の形態、模様、友禅染技術から判断すると、形態は江戸中期に近く、模様及び友禅染技術は江戸中期の様相は多分に備え乍ら未だそれには到達しない素朴さがある、といった江戸前期後半にふさわしい諸点が認められ、江戸中期の元禄まで後僅か八年といった伊達吉村出生の延宝八年当時のものであることは充分裏附けられる。以上の諸点からこの産衣は伝来通り五代仙台藩主伊達吉村所用といえるであろう。

挿図36 宝尽し文様腰巻部分 刺繍 江戸後期  
宮城・片倉信光氏蔵

さて、この産衣の友禅染技術について述べよう。先ずこの浅葱色の地染は藍の浸染つけぞめであることから。裾の破損部分から表裂の裏面が観察されるので、これは疑いの余地は全くない浸染である。模様部分を糸目糊註39と伏せ糊註40で裂の表裏両面に糊置防染註41した後、浸染し、こうして模様

(形状、法量、仕立て方)

下前(挿図34b)裾の損傷と後身頃左裾近くのみ、以外は損傷も褪色も汚れも殆どない保存状態のよい産衣である。

形状、法量は一覽表(美術研究二六七号、二、三頁)の(9)並びに挿図37、袖は紐通しの穴にしては袖の脇の部分のあきが長大で、仕立ての上からも振附小袖であるが、振の下端が前身の方は左右とも一・二センチずつ、後身の方は左右とも一・五センチずつ身頃脇にしっかりとくっつけてあるので(7)伝伊達綱村所用樺色網干に貝模様友禪産衣と共に(5)伝徳川綱誠所用白綾産衣も仕立ての上では振附小袖)全体の形状の上から見て振附小袖とはせず単なる小袖として一覽表に示した。また十三領中この産衣と(7)伝伊達綱村所用樺色網干に貝模様友禪産衣の二領だけに肩あげがある。総重量二一〇グラムの薄綿入れで、手ざわりの柔らかな羽二重ような紅平絹通し裏がついている。襟裏、紐裏も同じ裏裂が用いている。

この産衣の年代になると仕立て方も相当に整って来ているようで、左右相称の箇所は殆どの箇所が同寸法、縫い方も針目がこまかく整っていて、丁寧且つ几帳面に仕立てられている。

一つ身仕立てで後身頃は一幅の裂であるから背縫はなく図版七a、挿図39で見られるような守縫が、S撚藍染絹糸二本どりで行なわれている。守縫は二た目落としを裏面から見た裏針目の守縫で、今日という男児用産衣の守縫である。裏側には守縫はない。

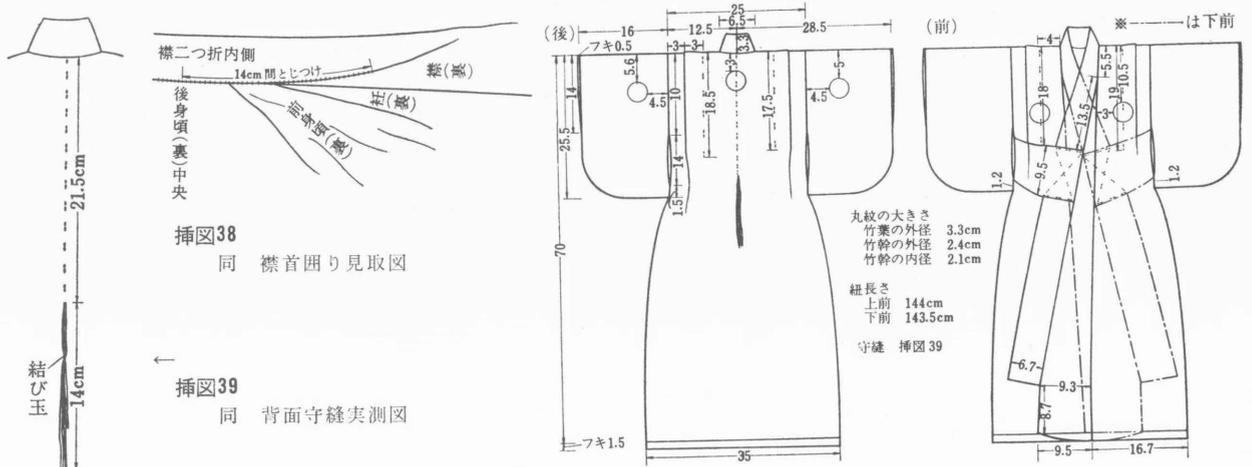
襟は背縫の延長線の位置で内側に二つ折りにし、左右それぞれ一四センチ間に折り込み分を笹の葉形に消してあり(挿図38参照)、内側に折り込まれた分は約一センチの針目で、S撚藍染絹糸一本どりでとじつけてある。この襟首囲りが二つ折りにしてとじつけてあるのは伝伊達綱村所用産衣(7)(8)二領と殆ど同じ方法である(美術研究二七二号、二〇、二二頁の挿図28、32参照)。

桃山・江戸前・中期の産衣十三領について 下

袖口、裾、振、身八つ口には襷があり、袖口襷は〇・五センチ前後、裾襷は一・五センチ前後で襷先は剣先風に仕立ててあり、振と身八つ口の襷は〇・一〇・二センチである。襟は裏裂が多少控えた寸法に仕立ててある。

袖口綿は裏袖の袖口の襷にふくませてあり、約一・七センチ内側に入ったところに約一・五〜二・三センチ間隔にS撚紅絹糸で襷とじがしてある。脇あきや裾には中入綿のとは見られず、また紐通しの脇あき、袖口等には補強のための留はない。

袖の丸みの作り方は外側からの触感による観察であるが、室町・



桃山・江戸初頭の頃の袖の丸みの作り方と同様、袖口下から袖下へかけての袖の丸みの縫目が一本だけで、袖の丸みを整える糸入れはなく、縫代の角は糸でぎりぎり巻きに縛ってある(美術研究二二八号、二六頁、挿図15参照)。この産衣の袖下の縫代は左右とも今日の仕立てと同様に前側に入っている。

紐通し穴は挿図37の実測図に示したように左右ともに両袖の振が下方の一・二〜一・五センチ間を身頃脇に前後ともくけつけてあり、袖の振と身頃の身八つ口が紐通し穴を兼ねた形になっている。これは(5)伝徳川綱誠所用白綾産衣、(7)伝伊達綱村所用樺色網干に貝模様友禪産衣とその大きさは異なるが形は同様である。

附紐は上前下前ともに、挿図37のようにS撚藍染絹糸二本どりで襟に縫いつけてある。挿図37の実測図に示した位置に肩あげがある。

仕立ては総体に丁寧で整っており、針目は、表裂と表裂の縫合わせの平縫が〇・三〜〇・四センチ、裏裂と裏裂、表裂と裏裂の縫合わせの平縫が〇・二〜〇・三センチ、くけ目が〇・五〜〇・七センチである。

縫糸は、表裂と表裂の縫合わせ、背面の守縫や紐附の飾縫、襟のとじつけにはS撚藍染絹糸、裏裂と裏裂の縫合わせ、表裂と裏裂の縫合わせにはS撚紅染絹糸が用いている(袖の振の下端が身頃脇にくけつけてある個所の糸は、右側—衣服自体の—は前後ともS撚紅染絹糸、左側は前後ともS撚藍染絹糸が用いている)。

(表裂)

紗綾形に蘭菊模様が地紋の綸子地で、友禪染で宝尽し模様が半模様風な構成に散らしてある。前述したように紋と模様の部分を両面糊置で防染して藍に浸染し(比較的濃い藍に三度ぐらゐ浸しているかと思われる)、こうして白あげにした紋と模様部分に線描、ぼかし、摺匹田を加えている。

この表裂の綸子は文丈<sup>もんぢけ</sup>一三センチ前後、窠間幅<sup>くぼまは</sup>六・二センチ前後、紗綾型の基本部分の長さ三センチ前後。密度は、一センチ間に、経糸は一三〇本前後、緯糸は三四越前後である。

(裏裂)

後染の紅平絹で、経糸、緯糸ともによく精練してあり、手ざわりが柔い。経糸は細く、緯糸の約半分の太さである。密度は一センチ間に、経糸は五〇本前後、緯糸は四二越前後である。

(紋所の紋様、大きさ、位置)

仙台伊達家の正式の家紋で、竹に雀の丸紋(図版七b)。二本の竹を用いた竹丸で、竹丸の内に飛雀を二羽相對させ、竹の幹は各幹四節、葉は各幹に二六葉——外側に一五葉、内側に一一葉——、竹の葉の露は各幹に八點—外側に六點、内側に二點—である。この産衣の丸紋の大きさは外径は竹の幹の外側で二・四センチ(外側の葉まででは三・三センチ)、内径は竹の幹の内側で二・一センチ、位置は挿図37の実測図照合。

- (10) 刈田嶺神社所蔵白平絹産衣 イ(図版八a、挿図41〜44)
- (11) 刈田嶺神社所蔵白平絹産衣 ロ(挿図45〜47)
- (12) 刈田嶺神社所蔵白木綿産衣 イ(図版八b、挿図48、49)
- (13) 刈田嶺神社所蔵白木綿産衣 ロ(挿図50、51)

右の四領は宮城県刈田郡蔵王町宮の刈田嶺神社に伝来している産衣で、これらは五代仙台藩主伊達吉村の生母である片倉氏阿松、貞樹院常照が享保十年十二月と享保十三年十一月の二回、それぞれ二領ずつ刈田嶺神社(別名を刈田白鳥児神社ともいう)に奉納したものとして伝えられている。奉納時の箱が二個あり、それぞれの蓋に「産衣 二領 享保十歳臘月吉日 奉刈田白鳥児神社 貞樹院常照」「産衣 二領 享保十歳十一月吉日 奉刈田白鳥児神社 貞樹院常照」(挿図40)とあるが、伝えられている産衣四領の中、何れの二領が享保十年で、何れの二領が享

保十三年であるかは不詳である。

奉納者の貞樹院常照は、片倉家三代小十郎景長の一女於松で、万治元年(1698)五月一日白石城に生まれている。母は片倉景長の室で古内主膳重広の一女、後の鑑照院である。田手氏伊達肥前宗房に嫁して長子吉村、次子村興を生む。貞享三年(1689)一月十三日宗房四十一才にて歿す、時に於松二十九才、以後貞樹院と称す。歿年は享保十七年(1733)、享年七十五才、法名は貞樹院殿心台常照大姉<sup>註48</sup>である。

さて、奉納された産衣は、伊達家乃至は片倉家の若君や姫の誕生と関連あるものかどうか調べたところ、この産衣の奉納された享保十年、享保十三年に該当する生誕者はないので、<sup>註49</sup>貞樹院に關係のある実在人物の生誕とは關係のない奉納品であることは推測される。

挿図40 刈田嶺神社産衣奉納時箱蓋  
宮城県 刈田嶺神社

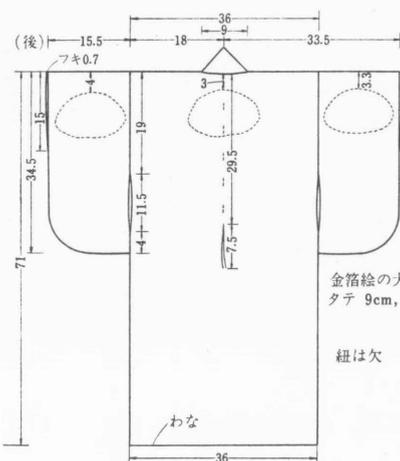
そして〔安永六年風土記御用書出〕の中「片倉小十郎領分風土記御用書出ノ内宮村分<sup>註50</sup>」の中に刈田嶺神社の由来や概要、刈田嶺神社と片倉家の関係、更に片倉家における刈田嶺神社への産衣奉納、刈田嶺神社所在地宮村の名称、宮村の旧跡、白鳥伝説との関

連などが記載され、現に今日に至るまで刈田嶺神社(別名白鳥明神)

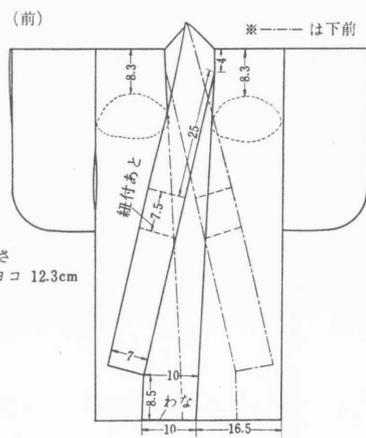
挿図42 同右 背面金箔絵



挿図44 同 背面守縫実測図



挿図41 刈田嶺神社白平絹産衣 1(10)



挿図43 同上 実測図

とその地一帯に伝わる白鳥伝説の関連が生きている事<sup>註51</sup>等を総合して考えると、これら四領の産衣は、刈田嶺神社、即ち奉納時の箱の蓋に書かれている刈田白鳥児神社に、誕生後間もなく白鳥と化して都に飛び立った日本武尊の御子若宮のために奉納した産衣と解される。

白平絹産衣イ(10)、同ロ(11)の二領は五つの紋の位置にある松竹鶴亀の金箔絵がイ(10)の方がよく残っており、ロ(11)は剝落が著しいという差異が最も顕著で、次に破損やしみの点ではイ(10)の方が多く、ロ(11)は比較的少い、といった二点が挙げられる以外、殆ど差異がないと云ってよい。従って金箔絵に剝落がなく破損やしみなどの生じなかった当初は恐らく一見して識別することは困難な産衣であったであろう。二領とも羽二重のようによく練った白平絹製で、裏も共裂、絹綿入れで、また紐通し穴が不必要な左袖附の前側にはない。

白木綿産衣イ(12)、白木綿産衣ロ(13)の二領は背面の守縫が異なるので識別できる。イ(12)は赤の絹糸二本どりで放射線風な三条の変った守縫(挿図48b)、ロ(13)は萌黄、黄、赤の絹糸三本を合わせた三本どりで挿図50cのような守縫が行われている。二領とも目の粗い白木綿製で、裏も共裂、木綿わた入で、また振袖である。

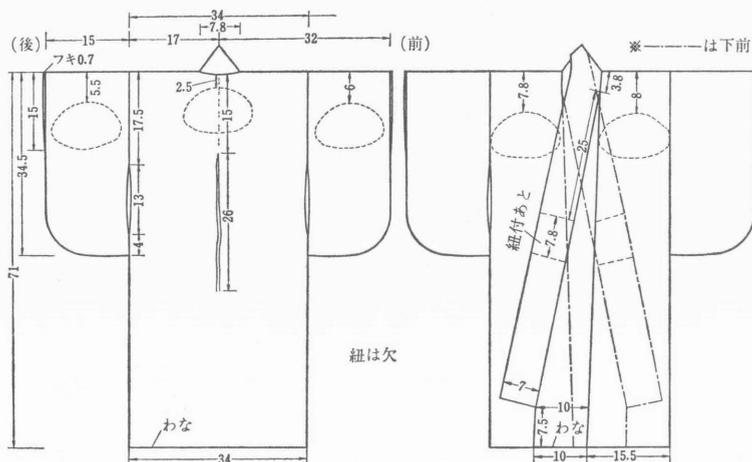
これら四領の産衣は、仕立ては多少粗い点があるが、しかし「うぶ」であり、形態上、仕立て上、江戸前期のものより江戸後期に近い諸点が

あるので、伝来通り江戸中期の享保十年、享保十三年の二度にわたって貞樹院常照が奉納した産衣四領と看做してよいであろう。

挿図45 刈田嶺神社白平絹産衣 ロ(11)

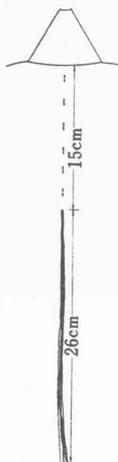
b. 背面

a. 前面



挿図46 同上 実測図

挿図47 同 背面守縫実測図



白平絹産衣二領

(形状、法量、仕立て方)

白平絹産衣イ(10)、同ロ(11)の金箔絵、破損、しみの状態その他の概要は先に述べた通りで、紐通しの穴が不必要な左袖附の前側の前側には徳川二代将軍秀忠産衣(1) (美術研究二六七号八頁挿図2照合)、伝毛利秀就段織綾産衣(2) (美術研究二

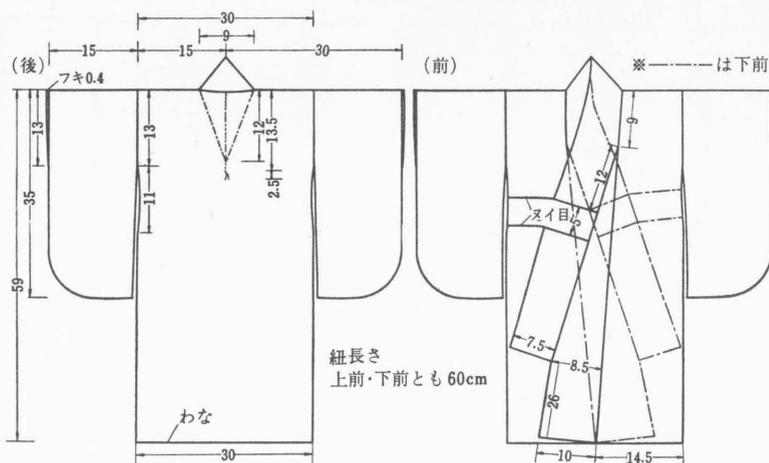
桃山・江戸前・中期の産衣十三領について

下

挿図48 刈田嶺神社白木綿産衣 イ(12)

b. 背面守縫部分写真

a. 前面



挿図49 同上 実測図

六七号一〇頁、挿図6照合)と同様である。

形状、法量は一覧表(美術研究二六七号、二、三頁)の(10)(11)、並びに挿図43、46、総重量は、イ(10)は一九四グラム、ロ(11)は一七三グラムの薄綿入れで裏は表と共裂である。後身頃と上前の衽は表が裾でわなになって裏に引き返えしになって続いており、上前の前身頃、下前の前身頃と衽は裾は縫目になっている(挿図

43、46)。袖口の衽は二領とも〇・七センチ、襟は裏が控えてあり、イ(10)は約〇・七センチ幅の衽、ロ(11)は〇・二センチ前後の細い衽になっている。

一つ身仕立てであるから背縫はなく、挿図44、47で見られるような守縫が二領ともS撚白絹糸二本どりで行われている。二た目落としを裏面から見た裏針目の守縫、即ち今日という男児用産衣の守縫である。

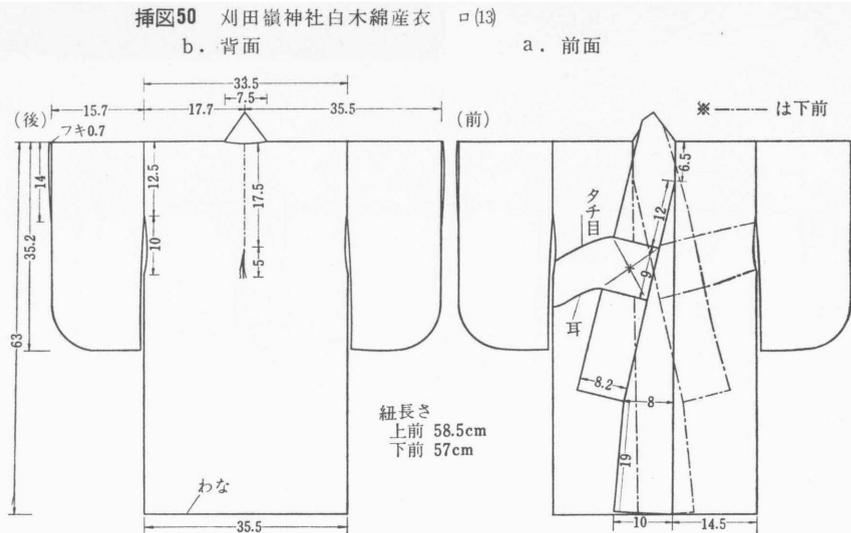
袖口にはイ(10)には裏側二・五センチ入ったところにS撚白絹糸で一・五〜二センチ間隔に中入綿のとじがあり、ロ(11)には裏側三・五センチ入ったところにS撚白絹糸で二・五〜三センチ間隔に中入綿のとじがある。

袖の丸みの作り方は、二領とも、等間隔に十本ほど放射線状の襷がとって整えられている様子が表裂に出ている凹凸の状態で見られる。その縫代は二領とも、今日の仕立てと同様前側に入っている。

また、二領ともに附紐のあった跡があり、イ(10)は上前、下前とも剣先から二五センチ下った位置より襟先に向って七・五センチ幅の紐附あとが、ロ(11)は上前、下前とも剣先から二五センチ下った位置より襟先に向って七・八センチ幅の紐附あとがあり、何れにもS撚白絹の縫糸が附着している。

仕立ては比較的丁寧で整っており、針目は、イ(10)は縫目が〇・

挿図51 同上 実測図



分こまかい。縫糸は二領ともZ撚白絹糸である。

(表裂、裏裂)

白平絹産衣イ(10)、同ロ(11)ともに羽二重のような経糸、緯糸ともによく精練してある柔い、織目のよくつんだ裂で、表裏共裂が用いてあり、イ(10)の密度は一センチ間に、経糸が四八本前後、緯糸が五四越前後、ロ(11)の密度は一センチ間に、経糸は四八〜五〇本、緯糸は五〇越前後である。

白木綿産衣二領

(形状、法量、仕立て方)

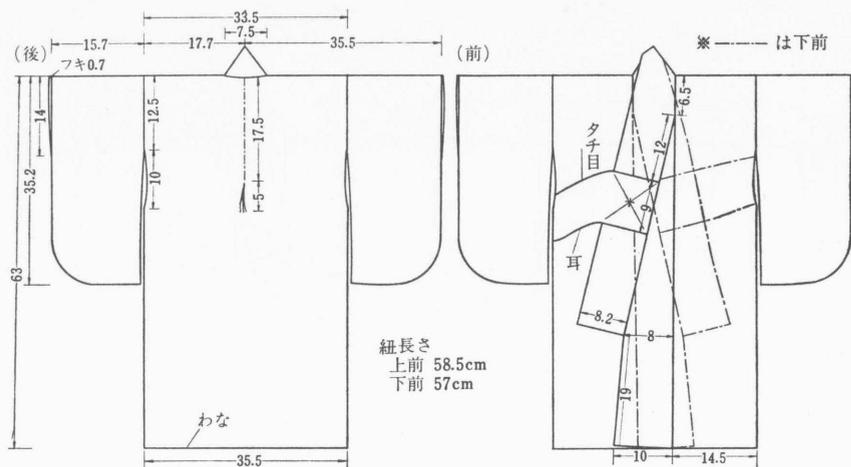
白木綿産衣イ(12)、同ロ(13)の二領は背面の守縫が明らかに異なるので識別できることは先に述べたが、守縫が放射線風な三条のイ(12)には紐飾縫のない二重のくけ紐の附紐がついており、ロ(13)には赤絹糸の紐飾縫がついた一重の附紐がついているが、それ以外は白平絹産衣イ(10)、ロ(11)のようにこの木綿の二領もよく似ている。

形状、法量は一覽表(美術研究二六七号、二、三頁)の(12)(13)、並びに挿図49、51。総重量イ(12)は二七〇グラム、ロ(13)は二八五グラムの木綿わたが比較的厚く入っている産衣で、裏は表と共裂である。二領とも後身頃は表がわなになって裏に引き返えしになって続いているが、前身頃は二領とも裾がわなになっている個所はなく、縫い合わせになっている。二領とも前身頃の裾と襟の裾は認めることはできるが、出来てから

挿図50 刘田嶺神社白木綿産衣 ロ(13)

b. 背面

a. 前面



c. 背面守縫部分写真

三センチ前後、くけ目が〇・五センチ前後、ロ(11)は縫目が〇・二〜〇・三センチ、くけ目が〇・四〜〇・五センチとイ(10)にくらべ幾

年数を経ているためか不揃いで裾幅はさだかでない。袖口と振の裾は、イ(12)が袖口〇・四センチ前後、振裾〇・五センチ前後、ロ(13)が袖口〇・七センチ前後、振裾〇・五センチ前後である。

一つ身仕立てであるから背縫はなく、挿図48 b、50 c で見られるような守縫がある。即ちイ(12)にはS撚赤絹糸二本どりで放射線風な三条の特殊な守縫、ロ

(4)には萌黄、黄、赤三本（何れもS燃の絹糸）の糸を引揃えた三本どりの守縫（これは二た目落としの守縫で今日でいう女児用産衣の守縫である）が行われている。

二領とも袖口や裾などに中入綿のと同じは見られない。

袖の丸みの作り方は、白平絹産衣の二領と同様に、この二領も等間隔に約十本ほど放射線状の襷がとって形が整えられているように表裂の上からの感触で推察した。その縫代は二領とも、今日の仕立てと同様前側に入っている。

襟はイ(12)は裏襟つきで、ロ(13)は一枚の裂を裏に返えして(挿図48a、50a照合)仕立ててある。

附紐はイ(12)の産衣は上前下前とも五センチ幅、長さ六〇センチの上下に縫目のある二重の紐で、くけつけてあるだけで紐飾縫はなく、ロ(13)の産衣は九センチ幅、上前五八・五センチ、下前五七センチの長さの二重の附紐で、この附紐は上側が裁ち目、下側が耳で、徳川二代将軍秀忠産衣(1)や伝毛利秀就所用紅絹産衣(4)の附紐と同様、単に裂を縦に引きさいただけのものを使用している。この一重の紐の先端は〇・七センチ幅に三つ折りにし、麻の縫糸で平縫で押さえてあり、襟にはくけつけた後、挿図50、51で見られるような簡単な紐飾縫がS燃の赤い絹糸二本どりで行われている。

仕立ては二領とも丁寧とはいえず、二領とも縫糸は晒さない麻(苧麻であろう)の燃の殆どない糸が用いられている。そして二領とも針目は縫目が〇・八センチ〜一センチ、くけ目は一・二センチ〜一・五センチとなっている。

(表裂、裏裂、紐裂)

白木綿イ(12)、同ロ(13)ともに表裏紐共裂で、この二領の木綿は同質であろうと思われる。経糸、緯糸ともにS燃で、平織。密度は一センチ間に、経糸は二二本前後、緯糸は一五〜一六越である。

追加(1) 伝徳川綱誠所用細格子産衣(図版9a、b、挿図52〜55)

追加(2) 伝徳川綱誠所用白平絹産衣(挿図56〜58)

桃山・江戸前・中期の産衣十三領について 下

(5)、(6)の産衣と同一人物の尾張徳川家三代綱誠所用産衣二領が新たに徳川美術館に於て発見され、その時期が本稿「中」を発表して間もなくであったため、それらの調査を早速に依頼、この「下」に追加(1)(2)の形をとって報告することにした。

追加(1)は「さいかうし色直服 泰心院様御誕生御式正呉服の内」として伝えられていたもので、尾張・徳川家の台帳には、「当家ニテ色直シ服トハ生児誕生後三一、二日目ニ於テ其式アリ夫迄ハ一切白ノ服ヲ用ヒ色直ノ式後色物ヲ用ユル例ナリ」と記入がある。

追加(2)は「白むく 泰心院様御誕生御式正呉服の内」として伝えられている。

追加(1)(2)の産衣二領は、仕立ても「うぶ」で、徳川綱誠所用と伝えられる(5)(6)二領の産衣と形態上、仕立て上、共通点が多いので、(5)(6)同様に伝来通り徳川綱誠所用と考えてよいであろう。

追加(1) 伝徳川綱誠所用細格子産衣

(形状、法量、仕立て方)

白と茶の細格子(こまかい格子)模様の中斐絹で、紅平絹の通し裏、肩あげがあり、薄綿入で総重量は一九〇グラムである。襟の重なり部分の上前、下前に茶色のしみが、ある以外は殆ど汚れも損傷もなく保存がよい。形状、法量は追加一覽表の追加(1)並びに挿図53。附紐も共裂で、紐裏は裏裂と共の紅平絹、襟裏も同様の紅平絹である。

(5)、(6)の産衣で観察されたと同様、仕立て方は、室町・桃山期衣類に共通して認められた仕立て方上での鷹揚さは殆どなくなっており、左右相称の箇所は大部分が左右同寸法、縫い方は丁寧、且つ整っているようである。

一つ身仕立てで、後身頃は一幅の裂であるから背縫はなく、図版9b、挿図55

(追加) 桃山・江戸前・中期産衣, 形状・法量一覧表 (寸法の単位はcm)

		中入綿	紐	守縫背縫	肩あげ腰あげ	袖の形	袖附	身八つ口	紐通し穴	a 袖幅	b 後身幅			
追加(1)	伝徳川綱誠細格子産衣承応1 (1652) 8.2 生	薄綿入	附紐	守縫	肩あげ	小袖	14.0	11.0	11.0	14.7	19.5			
追加(2)	同上白平絹産衣	薄綿入	附紐	守縫	なし	小袖	13.0	10.0	10.0	14.3	17.5			
b/a	c 襟肩 ×2	d 衿下り	e 立襟 (襟下)	f 衿幅	g 合襟幅	h 前身幅	i 衿	j 袖口	k 襟幅	l 袖丈	m 身丈	重量	照合 実測図	備考
1.32	8.5	8.0	6.5	10.5	10.2	18.5	29.0	12.0	7.0	28.0	64.5	190g	挿図53	
1.19	6.0	5.5	8.5	9.5	8.5	17.5	32.0	12.0	6.0	25.5	55.5	115g	挿図57	

美術研究 二八〇号

で見られるような守縫が S 撚白絹糸二本どりで行われている。二た目落としを裏面から見た裏針目の守縫で、今日という男児用産衣の守縫である。(5)の白綾産衣には裏裂にも背と裾に糸じるし風な守縫のようなものがあつたが、この産衣には(6)の薄浅葱小紋産衣と同様に裏裂には全くない。

襟は襟首囲りを背縫の延長線の位置から左右に各十二センチ間を二・八センチ幅内側に折り込み S 撚白絹糸で〇・五〇・七センチの針目でとじてつけてある(挿図54)。

袖口、裾、振、身八つ口には裾があり、袖口裾は〇・六センチ前後、裾裾は〇・七センチ前後で裾先は剣先風に仕立ててあり、振と身八つ口の裾は〇・二〇・三センチ

である。襟と紐は表裂と裏裂が突き合はせて縫い合はせてあるが、襟の方は裏裂が〇・一〇・二センチぐらい多少控えてくけつけてあるよう、襟先は弓形に剣先風になっている。

袖口、紐通しの脇あき、裾、何れにも中入綿のとはなく、また紐通しの脇あき、袖口等には補強のための留はない。

袖の丸みの作り方は外側からの触感による観察であるが、室町・桃山・江戸初頭の頃の袖の丸みの作り方と同様、袖口下から袖下へかけての袖の丸みの縫目が一本だけで、袖の丸みを整える糸入れはなく、縫代の角は糸でぎりぎり巻きに縛ってある(美術研究二二八号、二六頁、挿図15参照)。袖下の縫代は左右とも今日の仕立てと同様に前側に入っている。

紐通し穴は挿図53の実測図に示したように左右ともに両袖の振が下方の約三センチ間を身頃の身八つ口前後ともくけつけてあり、袖の振と身頃の身八つ口が紐通し穴を兼ねた形になっている。これは(5)伝徳川綱誠所用白綾産衣、追加(2)伝徳川綱誠所用白平絹産衣、(7)伝伊達綱村所用樺色網干に貝模様友禅産衣、(9)伝伊達吉村所用浅葱宝尽し模様友禅産衣と大きさはそれぞれ異なるが形は同様である。

附紐は上前下前ともに、挿図53のように S 撚白絹糸二本どりで裏側(襟の裏)に大針目が出て縫いつけてある。挿図53の実測図に示した位置に肩あげがある。仕立ては総体に丁寧で整っており、針目は縫目が〇・二〇・三センチ、くけ目が〇・六センチ前後である。

縫糸は、表裂と表裂の縫合わせ、背面の守縫、紐附、襟のどじつけ、肩あげには S 撚白絹糸、裏裂と裏裂の縫合わせ、表裂と裏裂の縫合わせには S 撚紅絹糸が用いてある。

(表 裂)

先染、こまかい格子縞の甲斐絹で、経糸は細く(緯糸の1.3ぐらいの太さ)二本ずつ寄っており、白茶一〇本、赤茶一二本で一かえり(白茶の縞幅は二・四ミ

リ、赤茶の縞幅は二・六ミリ、従って堅一かえりの縞幅は〇・五センチ、緯糸は太く、白一〇越、黄土色一二越で一かえり（白の縞幅は約二・五ミリ、黄土色の縞幅は約三・五ミリ、従って横一かえりの縞幅は〇・六センチ）、密度は一センチ間に、経糸は四四本前後、緯糸は三六越前後。

甲斐絹であるから経糸も緯糸も多少練ってあるだけで練が少なく、また糸は平糸に近く殆ど撚がない。従って裂は表面に光沢があり、肌ざわりもパリッと張りがある。

(裏裂)

後染の紅平絹で、身頃や袖の裏、襟裏、紐裏は共裂である。羽二重のようなよく練ってある柔い裂で、経糸は細く緯糸の1/2ぐらいの太さ。密度は一センチ間に経糸は四六本前後、緯糸は四八越前後である。

追加(2) 伝徳川綱誠所用白平絹産衣

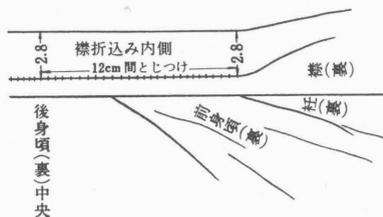
(形状、法量、仕立て方)

白地の黄ばみ以外は殆ど汚れも損傷もない保存状態のよい産衣で、表裏附紐共裂の白平絹で薄綿入、総重量は一一五グラムである。形状、法量は追加一覽表の追加(2)並びに挿図57。(5)、(6)、追加(1)の徳川綱誠所用産衣三領と同様、仕立て方は、室町・桃山期衣類に共通して認められた仕立て方上での鷹揚さは殆どなくなっており、左右相称の箇所は大部分が左右同寸法、縫い方は丁寧、且つ整っているようである。

一つ身仕立てで、後身頃は一幅の裂であるから背縫はなく、挿図58で見られるような守縫がS撚白絹糸二本どりで行われている。二た目落としを裏面から見た裏針目の守縫で、今日でいう男児用産衣の守縫である。背面の裏、襟附中央部分に挿図58で見られるような糸じるし風な守縫のようなものが見られる(5)伝徳川綱誠所用白綾産衣

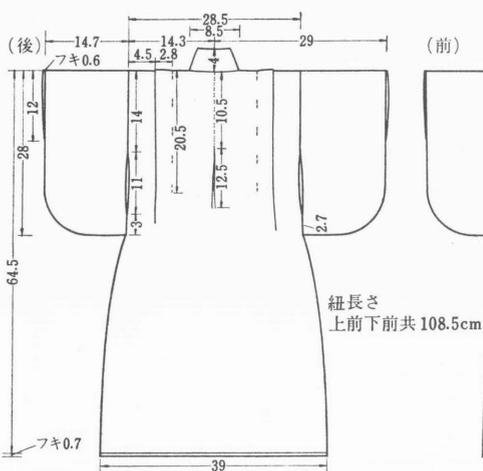
桃山・江戸前・中期の産衣十三領について 下

にも裏裂に背と裾に糸じるし風な守縫のようなものがあり—美術研究二七二号、一一頁、挿図16、17参照—、(7)伝伊達綱村所用棗色網干に貝模様友禅産衣の裏裂にも背に糸じるし風な守縫のようなものがある—美術研究二七二号、二〇頁、挿図29参照—。袖口、裾等には中入綿のと同じではなく、また補強の留も何処にもない。袖の丸みの作り方は外側からの触感による観察

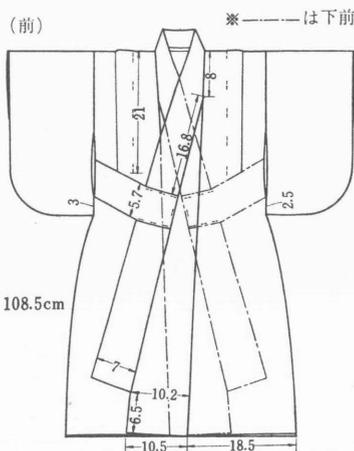


挿図54 同襟首回り見取図

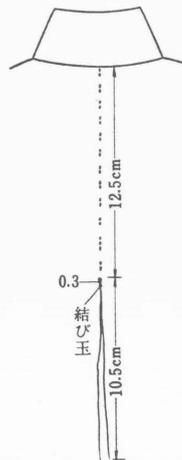
挿図52 伝徳川綱誠所用細格子産衣 追加(1) 背面



挿図53 同上 実測図



挿図55 背面守縫実測図





ることができた。これら十五領の産衣は、所用者生誕の年月、或は奉納年月の明らかなものばかりであるから、所用者のわかつている成人用衣服の場合に考える製作年の幅<sup>註52</sup>がなく、年代の明らかな点では至って貴重な資料で、これらによって様式を知り変遷の跡を辿ったことは有難いといわなければならない。

今ここで、衣産十五領の詳述を了え、十五領を概観してみると、それは本稿「上」(美術研究二六七号)で述べた「二 産衣十三領の概要」(美術研究二六七号 二頁〜六頁)に追加二領の調査事項を挿入したものである。

即ちこれら十五領の調査から得た桃山・江戸前・中期の武家における産衣の様式、形態の変遷は次のように考察される。

調査の対象となった十五領の産衣は何れも伝来がよく、かつ「うぶ」で、その「うぶ」な形態、仕立てから考察をすすめると、伝来にもとづく所用者生誕当時の大裁(成人用)小袖、大裁帷子に見られる特徴(美術研究二二八号―伝上杉謙信所用小袖十二領―一七頁〜一九頁、美術研究二二三号―伝上杉謙信所用帷子四領―二頁〜三頁照合)が、これら産衣には小形ながらそれぞれによく備わっており(美術研究二六七号―本稿上―二、三頁表及び追加表、各産衣「形状、法量、仕立て方」照合)、その形態、仕立ての立場からは、ほぼ伝来の時代的裏付けは行うことができた。

この十五領の形状、法量(美術研究二六七号、二、三頁表、並びに本号二四頁追加表照合)並びに仕立て方を概観すると、時代の上るもの、即ちこの中では徳川秀忠と毛利秀就の産衣の計四領(1)(2)(3)(4)は、室町末、桃山、江戸初頭の大裁初期小袖の最も目立つ特徴である狭い袖幅(a)と

広い身幅(後身幅はb、前身幅はh)、短い立裄(e、襟下)、狭い襟肩アキ(c)が小形であるために大裁の初期小袖よりは誇張されていて著しい特徴となつてあらわれている。それらの特徴は時代が下るに従つて袖幅が広くなり身幅が狭くなつて、江戸中期に近い江戸前期後半の伊達吉村産衣(9)や江戸中期の刈田嶺神社産衣(10)(11)(12)(13)に見られるように江戸後期以降の産衣とほとんど変らない形になっているのがわかる。大裁の小袖、帷子、胴服の場合、室町、桃山、江戸初頭、江戸前期と変化を続け、江戸中期になると一応形が整つて決まるようで、その形が江戸後期、幕末、明治と形態の上では殆ど変化がないのであるが、これと同様な現象がこの武家の産衣にも見られる。

ただ大裁の場合は大裁の小袖、帷子と異つて、江戸中期、後期、そして明治になつても立裄(e、襟下)が大裁のもの比率ほどには長くならず、初期の頃と大差なく短い。

また一つ身には背縫がないものであるが、毛利秀就産衣(2)(3)(4)には三領ともに背縫があり、従つてこれら三領には、通常一つ身の背中上方に背縫の糸じるしのように施される「守縫」がない。十五領中、他の十二領には何れにも守縫があり、(12)(13)の刈田嶺神社本綿産衣二領には特殊な守縫と今日行われている女児用の守縫である二た目落としての守縫が行われているが、他の十領には何れも今日男児用に行われる二た目落としての裏針目の守縫が施されている。刈田嶺神社奉納の産衣四領はともかく、他の十一領はすべて男児用産衣であるから、今日男児用に行われている二た目落とし裏針目の守縫は少くとも徳川秀忠の出生した天正七年には既に行われており、その後も武家男児の産衣には大方の場合はこの二た

目落とし裏針目の守縫が施されていたことが知られる。

附紐は下着になる伊達綱村産衣(8)が背に縫いつけられているほかは、今日の小裁、中裁の着物同様、上前下前にそれぞれつけられている。紐附の飾縫は江戸の中期頃までは殆どなかったのではないかと推測され、刈田嶺神社木綿産衣(12)に簡単な附紐飾縫らしいのがある以外は何れにも見られない。

その附紐を通す穴は、後世は袖の振や身頃脇の身八つ口を紐通しの穴に兼ねさせているが、初期の二領徳川秀忠産衣(1)、毛利秀就産衣(2)は、袖附に、上前の紐が通る右脇には袖附の前後に穴があけてあり、下前の紐が通る左脇には後袖附にだけ紐通し穴があけてあるといった合理的な工夫が見られ、それと同様な紐通し穴が江戸中期の刈田嶺神社白平絹産衣二領(10)(11)にも見られる。江戸前期の徳川綱誠産衣(5)と追加(1)(2)の三領、伊達綱村所用友禅産衣(7)、伊達吉村友禅産衣(9)の五領は、紐通し穴は左脇の袖附前にも右脇の袖附前と同様に穴があけてある。

肩あげのあるのは江戸前期の徳川綱誠産衣追加(1)、伊達綱村友禅産衣(7)、伊達吉村友禅産衣(9)の三領である。

袖の形は徳川秀忠産衣(1)が平袖である以外は小袖で、その中で振のついているのが毛利秀就産衣(3)(4)、徳川綱誠産衣(6)、刈田嶺神社白木綿産衣(12)(13)の五領である。袖に関して江戸後期の産衣まで通して見ると、古い時代のは総体に袖が小さく(袖幅が狭く、袖丈も短い)、それが次第に袖幅も袖丈も伸びて、江戸中期以降は大きい袖に一定しているようである。

仕立ての方も大裁のものと同様、初期のものは裁断も縫製も鷹揚で、

技術的には粗い感じを受けるものさえあるが、江戸初頭を過ぎる頃からは次第に丁寧になり、中期近くになると後期以降のものと殆ど変わらないまでに技術が達者でかつ丁寧になっている。

次に用いられている裂地は、麻が一領(1)、絹が十二領(2)(3)(4)(5)(6)(7)(8)(9)(10)(11)追加(1)、追加(2)、木綿が二領(12)(13)で、この中(2)(3)(4)の裏裂は木綿である。また中入綿は(3)(12)(13)は真綿でなく木綿わたである。

絹では(2)の表裂の段織になった綾、(3)は節糸を使った緋絹、(4)は紅紬、(5)は地紋が松竹鶴、亀甲の吉祥文様の白綾、(6)は薄浅葱小紋染の平絹、(7)が樺色友禅染の平絹、(9)が浅葱友禅染の綸子、追加(1)が細かい格子の甲斐絹、(8)(10)(11)追加(2)は羽二重よりの白平絹となっている。

この中(7)の友禅染は万治二年のものであり、友禅染最古の資料としても貴重である。

十五領中、紋附は(5)(6)(7)(9)の四領で、(5)は繡の五つ紋、(6)(7)(9)は白の染め抜きに墨入れをした五つ紋である。この紋の周囲に松竹梅鶴亀が箔絵等で施してあるのは(5)(6)で、(5)は銀箔絵、(6)は染抜きの白に墨で加筆、このほか(10)(11)の刈田嶺神社白平絹産衣は紋はないが紋の位置五ヶ所に松竹梅鶴亀が金箔絵で施されている。

以上、桃山・江戸前・中期の産衣十五領の調査によって、江戸後期以降における産衣の種々な様式が、如何なる経過で生じたものか、江戸中期頃までの様相が大方のところ見当づけられた。更にこの武家系産衣のスタイルが、公家や一般庶民にも多大な影響を与えながら江戸後期・明治・大正・昭和に及んでいることを江戸後期以降の産衣を通して窺い知るのである。

なお「産衣」の用語に関して調査したところをまとめる予定であったが、稿を改めることにして、本稿では、はじめにもことわったように、産衣、祝衣等、初生児から一、二才までの小児の用いる小袖、帷子を一括「産衣」と称する便法をとったことを再度記しておく。

(一九七二年一月)

なお、本稿の調査に当り、御多用中にもかかわらず御便宜をおはかり下さった毛利博物館の佐伯敬紀氏、徳川美術館の熊沢五六館長外館員諸氏、刈田嶺神社宮司の佐藤定保氏、奥州白石郷土工芸研究所長の片倉信光氏、伊達綱村、同吉村所用産衣の所蔵者平野実氏の御子息平野清氏、共立女子大学教授の山辺知行氏、東京国立博物館染織室長の今永清士氏に厚く御礼申し上げます。

註

- 32 桃山・江戸期の綸子地には紗綾形に蘭菊の地紋が圧倒的に多い。
- 33 型紙を用いて匹田紋り（総鹿の子）の模様をあらわしたものの。匹田模様の型紙を裂地に置き、染料や顔料を摺り込むので「摺匹田」ともいわれる。
- 34 註24（中、美術研究二七二号、二三頁）
- 35 宝尽しは日本の文様の中でも特異な一形式で、元来は中国系。宝尽しの中には、不思議な魔力を持つ隠れ笠、隠れ蓑、打出の小槌、宝珠のようなものから、貴重なもの、即ち巻絹、金囊、宝袋、鏝、結綿、分銅、丁字、七宝など、更に瑞祥の寿字を加えたものもあり、特に吉祥的な意味が強い文様として祝衣や礼装などに用いられている。
- 36 室町時代末より桃山・江戸初頭にかけて、主として中国から渡ってきた文化と同時に伝えられた明時代を中心とした高級な織物。当時わが国の有名な茶人や好事家、高級武家などは、その頃舶載された夥しい量の染織品の中から自分たちの嗜好に適したものを選択して茶道の名物である茶碗や茶入れの袋に作ったり、掛物の表具に用いて楽しんだが、これを後世の人がその愛好者の名前をつけたり文様の名称に従ったりして——金襴とか——緞子とか呼び名物裂と称して珍重した。挿図35は名物裂中、宝尽文様の二例。
- 37 江戸前期ごろまでは、絵模様の素材が単一であっても組合わせてであっても、模様の特徴

つ意味はほとんどの場合、季節感や吉祥的な内容であった。例えば二つ三つの素材の組合わせの場合でも、梅に鶯、竹に雀、柳に燕、浪に千鳥、流れに水禽、雲に鶴など、動物・植物・天然現象の間に見られる季節感や自然の状態に即した組合わせであったり、または桐に鳳凰、牡丹に唐獅子、流水に菊、猿に南天といった伝説・伝承・故事による組合わせの吉祥模様であったが、これらの意味の絵模様に江戸の中期ごろから、凡そ大別して次のような意味を持つ絵模様が加わり、素材の組合わせも複雑化した。

- 1 伝説・伝承・故事・諺などによる絵模様の種類の増加
  - 2 年中行事に関連した絵模様
  - 3 物語・詩歌などに取材したもの
  - 4 歌枕や名所の風景を現わしたもの（江戸中期末から後期にかけてかなり現われる。近江八景・須磨明石・日本三景・淀・住吉・宇治・吉原・六玉川など）
  - 5 俗信（例えば、蛤の年を経たものが海中で気を吐くと蜃気楼があらわれるなど）
  - 6 判じ物的なもの（例えば、斧と琴柱と菊を組合わせた模様は斧と琴と菊で「好き事聞く」としゃれたものなど）
- 等、絵模様の意味するところが説明的なら描写も写実的で詳細なといった説明的なものも多くなっている。
- 38 「浸染」というのは染液につけて地染をする染法（註31美術研究二七二号、二三頁参照）
- 39 註25（上、美術研究二七二号、二三頁） 40 註30（ ）
- 41 浸染の場合、模様部分を白く明瞭にあげるためには、表裏両面から糊を置いて防染し染液の浸入を防ぐ。
- 42 註33照合 43 註28（中、美術研究二七二号、二三頁） 44 註29（ ）
- 45 「半模様」というのは二分された上下の下半に模様がつけてあり、上半には模様ごく少いか、無地か、無地に家紋か伊達紋だけがあるといった構成。
- 46・47 註12（上、美術研究二六七号、一七頁）
- 48・49 白石・片倉信光氏調べ——仙台人名大辞書、片倉代々記
- 50 白石・片倉信光氏調べ
- 51 白鳥の里——刈田郡の白鳥伝説——片倉信光（宮城警友一九六五年三月号）
- 52 所用者の明らかでない大人用の衣服は製作年を推測する場合、所用者が成人後歿年までの比較的長期の幅が考えられる。